
空白の話 ～イブツ運び～

牛を飼う男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の話　　くイブツ運びく

【Nコード】

N6663H

【作者名】

牛を飼う男

【あらすじ】

く夏のホラー2009参加作品く

若くして白髪姿の男、ドウジは芝生の上でいつものように煙草をふかしていた。すると、突然男から「話を聞いてくれ」と懇願される。男は『納棺師』という職業に憧れていたが、その過酷な現実に挫折し、『クリーンキーパー』という死後の清掃と遺物運びを主にする仕事をしていたという。

ある日、病死した女性の母親から仕事の依頼がやってきた。その

凄まじい現場で見た異様なモノとは――。

『空白の話』シリーズ第2話。

『一俺は…狂ったのか？』

―千の物語があれば千の解釈が生まれる―

―この話を聞いたあなたはどんな解釈をするだろうか―

―例えその解釈が悪かろうと―

―俺はただ物語を綴るだけだ―

『空白の話　くイブツ運びく』

若い男が川辺の斜面上の緑の芝生の上で煙草を吸っていた。空は青空で遠くに入道雲が見える。黄色い蝶が草花を舞い、死んだ虫を運ぶアリの姿も見られる。すっかり季節は温暖な気候へと変化していた。

緑の匂いが心地よく、川から湿気の含んだ空気が肌に当たる。遠くで市から委託された清掃業者が草を刈っているが、特別男は気にならなかった。この日は本当に平和という言葉がよく似合っていた。男は白髪で汚いコートを着、『セブン』と書かれた煙草を吸って

いる。その風貌は若年ホームレスと見間違ふほど小汚い。しかし、その神秘的な白髪と端整な顔はホームレスとはまた違う空気を醸し出していた。

「あんちゃん。煙草一本くれねえか？」

本物のホームレスが白髪の男に近寄ってきた。弓のように曲がった眉1つ変えず、白髪の男はホームレスに煙草を差し出した。ホームレスは煙草を咥えると、火もついでにもらい、一息入れた。

「…あんちゃんここで何してんの？ 見た所まだ20歳ぐらいだと思うけど？」

もう老齡のホームレスにとって若い男がこんな所にいるのは珍しいらしい。確かにここは草花がなく、平日の昼間から寝そべってる若者は誰もいない。

「別に。ただ一休みしてただけさ」

長い前髪の隙間からチラリとホームレスを見ると男はそう答えた。

「駄目だぜ。その若さでこんな所にいちゃ」

ホームレスが笑った。別段嗜めているわけでもないらしい。その言葉に悪意はない。

「確かに暇だな。なあ。何か面白い話はないか？」

唐突に若い男が話を切り出した。老年ホームレスは何事かと目を丸くした。

「面白い話？」

「ああ、都市伝説、童話、昔話、怪談話…なんでもいいんだ。一人に言えない話でもいいぜ」

「物語なんてこの年になっちまったら忘れちまったよ」

「…そうかい」

大して期待もしていなかったのだろう。白髪の男がゴロリと横になった。

「―なあ」

急に話しかけられた。老年ホームレスとは違う声だ。横になった男が目を開ける。すると、1人の男がホームレスと白髪の男の前に

立っていた。

「うん？　なんだ？」

ホームレスが顔をしかめる。

「あんた等か？　人には言えない話を聞いてくれるって奴は？」

帽子をかぶり、今時の若者らしいファッションを着ている。ただ、何かが気になるのか、周りをキョロキョロ見回している。

「ああ聞いてやるよ。ちょうど暇だったかな」

ホームレスはそう言うで大あくびした。男はその態度すら気にならず、またキョロキョロと周りを見回した。

「ーじゃ、聞いてくれ」

『納棺師』って知ってるか？

亡骸に死装束を着替えさせて、死に化粧を施し、棺に納める仕事をする者のことだ。

前に映画になっていくつもの賞を取っただろう？　その美しさと死に対する美德ってやつかな。俺はその職業に感動して転職を決意したんだ。

でも現実は違った。

本当に映画ってのはフィクションだと実感したよ。映画の中で扱っている死体は『原型を留めている』やつが多いけどさ、実際は交通事故死や腐乱死体、孤独死に自殺とか『原型を留めていない』死体ばかりなんだよ。そんな死体に死装束なんて着せられないだろ？　だから死体を運び出すのが主な仕事だったんだけど、ある時腐乱死体が見つかったんだよ。たぶん老人の自殺か何かだったと思うけど事件性はないってことで俺らの会社に死体を運びだす仕事が来

たわけ。まだ新人の時で映画のような美しい死体にしてやるって息巻いてたけど一目見て意識がすっ飛んだね。

だって肌の露出部分が野良犬かカラスに食われてボロボロになってんだぜ？ しかも腐臭がすごくてもう胃の中のもの喉まで達してたね。こうなるまでほっとかれたのは町の人通りの少ない川原だったってのがあったんだろうな。「猫かお前は」って遺体を慰めるどころか文句言っちゃったよ。それで運び出そうと思ったんだけどさ。

頭の部分を持ったら簡単にもげちゃったんだよ。

首から白い糸のようなものが出てきて骨と赤黒い腐った肉が見えてんだよ。その糸が近くが川なもんだから水分含んでてさ。俺の腕にピチャって張り付きやがった。蜘蛛の糸ならともかく人間の体から出てる訳の分からないものだぜ？ 「ひゃ！」って叫んで頭投げちゃったんだよ。

そんな事やらかしても先輩は薄ら笑いうかべてただけで怒られなかったけどさ。もう我慢できなくて川まで走って嘔吐したね。その後ゴシゴシって川で白い糸がついた部分を必死で洗ったよ。もうそれで駄目。嫌になった。

そんな事があったから社長に仕事をやっていくのは無理だって言っただ。零細企業だから社長なんていつも事務所に座ってるのを見るよ。

「それなら別の仕事をやってみるか？」

社長も長続きしないだろうなと予想はしてたんだろうな。社長の持論ではどんな職業でも高い理想を持って入ってくる奴はしょせん長続きしないんだと。年寄りの言う事だと思っていたけどその時は真剣に聞いたね。

それであれだけ親に理想を語つというてすぐ辞めるのも情けないと思うってその仕事を受けたんだ。

—これが最悪の仕事だったよ。

『クリーンキーパー』。

名前だけ聞くと単なる清掃屋だけど実際やる事は自殺者や孤独死したマンションの部屋を清掃したり、遺物をマンションから持ち出したりすることさ。えっ？ そんなものいちいち専門業者に頼まずに普通の業者に頼めばいい事だって？ その気になれば家族でできるだろう？ 素人はよくそう言うんだよな。

自殺者の部屋の清掃に行ったことあるけどさ。何せ『死臭』がすごいんだ。よくテレビなんかで独身の老人の部屋が臭いから調べてみたら死んでたつてのがあるだろう？ 実際そんなに臭いのかというと、隣の部屋まで臭うほど凄まじく臭い。一回かいでみな。本当にすごいぜ。汚物垂れ流して死んでるんだから。

そういう部屋で問題になるのはこの『死臭』で普通に掃除した所で臭いはとれないんだ。それに普通の業者は嫌がるんだと。そうこうしているうちにどうにもならなくなって、マンションの家主は部屋をリフォームしなくちゃならなくなって費用が馬鹿高くなる。それで最終的にウチらみたいな会社に助けを求めるってわけ。それでも死体から出る体液が床になんて染みついちまったらもうお手上げだけだね。人間の死液はゴキブリを潰した時にでるアレよりやっかいだぜ。

最初は慣れなかったけどようやく慣れてきて3ヶ月ぐらいたったかな。ある女性の部屋を掃除してくれて依頼があったんだ。それで作業着を着て、道具を持って部屋のドアを開けた。

「おごっ!？」

もうすごい『死臭』だよ。こればかりはなかなか慣れなくて早くもムセた。40ぐらいの先輩は「大丈夫か？」と声をかけてくれたよ。大人しくてやせ細った人だったけど、仕事は丁寧で真面目な人だった。

「すっ、すみません…」

「いいよ。さあ仕事をとっと片付けちまおう」

先輩は手を合わせると部屋の中へと入っていった。

―依頼主は女性の母親。遺品はすべて処分してくれとのこと。立会いはなし。この日も結局見にも来なかったな。家主に部屋を元に戻せないのならリフォーム代払えとか散々言われたみたいだぜ。

仏さんは女性。年齢は38歳。警察の判断では何かの病気で死んだらしい。配偶者はなし。小型犬を飼ってたみたいだけどミイラ化してたって聞いたな。もう死んで1ヵ月になる。働き盛りだったのね。

部屋の中は凄惨な状況だったよ。まずカーペットやら床とかに赤黒い血が広がってるんだ。かなりの吐血したんだな。薬を探していたのかあちこち引っ掻いたり、物を倒したりしてたからまるで泥棒でも入ったんじゃないかと思ったよ。いったいどんな死に方をしたんだとブルツたね。

白い壁紙を張った壁ってあるじゃん？ あそこに爪がくつついてんだよ。つけ爪だろうと思うけどいい気はしない。もう早くもここから出たかったね。

「まずこのカーペットから片付けるか」

本当に事務的で淡々とした先輩で助かってる。だって1人冷静な人がいるとこちらも気が引き締まるだろ。この人と組んでよかったと思う瞬間だね。

とりあえずどっかの会社が開発した『死臭用の消臭剤』を設置する。効果はすごいよ。2〜3週間で消えるってんだから。この臭いがさ。

消臭剤を起動させると「ブーン…」という機械音がして徐々に死臭を取り除いてくれる。普通なら死臭がなくなるまで外に出とくんだけど、今回は時間もないしってことでそのまま仕事を続けた。先輩は慣れてるしね。俺は慣れてないけど。

「ここで犬が死んでたらしい」

先輩が指差したカーペットには特に黒いシミが凄かった。だぶんここで倒れてたんだろう。どんな病気だったのかわからないけど。

主人が死んだ時、犬ってどんな気持ちになるんだろ。主人がピクリとも動かない。きつと鼻で主人を動かそうと必死になったんだろうな。何度鳴いても動いてくれない主人にどんな気持ちだったんだろうな。もう想像していると泣けてくるよ。あつ、あの盲導犬の映画見たかい？ 見てない？ なら犬との約束ってのは？ 興味ない？
…あんた等動物嫌いなのかよ。まっ、いいけどさ。

（駄目だ駄目だ…）

いちいち感情移入してたらこの仕事はやってけない。さっさと仕事しよう。

部屋の中を探してみるとお笑いの録画DVDが多かったな。俺あんまり見ないんだけどさ。レッドなんたらとか、なんたらの金メダルとか。絶対に笑ってはいけないなんたらとかもあったぜ。まあ興味がないんでさっさとダンボールの中に入れたけどな。

次にクローゼットの中を探してみたらブランド物のバッグやらコートやらがあったぜ。これも俺はさっぱりわからない。この不況にこんな物買えるなんてそれなりの給料貰ってたんだろうな。まあどうでもいいからさっさとダンボールの中に入れたぜ。

さらに小型犬の服や小物もあった。大事にしてたんだろうな。どんな犬種かは知らないけど。

あとはサプリメントも多かったな。ビタミンCやらコラーゲンやら。化粧水も高級なの使ってたやがるし。

「何かいるものはあるか？」

「えっ!？」

仕事をしていると普段はまったくしゃべらない先輩が話しかけてきた。

「ほしいなら持っていったいいよ。依頼者から許可は貰っている」

「そっ…それは…」

「冗談だよ。どうせこれらはリサイクルとして売るんだから。まっ、

これは廃棄だな」

血のついたカーペットを丸めながら初めて冗談を言った先輩をマジマジと見た。まあ今思えば冗談でも言わないとやっていけないかったんだろうな。

えっ？ リサイクル？ 処分するんじゃないのかって？ それはあんた等だってやってるだろ？ リサイクルショップなんてそんなのばっかだぜ。

「さて、それじゃこれ車に乗せてくる」

「はっ、はい」

先輩は外へと出て行った。

残された俺は気持ちを切り替えてまた作業へと移った。

「…うん？」

先輩がどかしたカーペットの下を清掃していると、何か文字が書かれている。しゃがんでよく見てみると、血文字だ。

『—なんで』

うわっ、ダイイング・メッセージだよ。死者の伝言ってやつ？ けどどこれは犯人を示す手がかりじゃない。ただの無念さが滲み出ている。だって「なんで」だぜ？ なんで死んだのかとか、なんで私だけとか…もうめっちゃ想像しちゃったよ。気味悪いったらありゃーしない。

ダイイング・メッセージってよく推理物ドラマなんかでやるけど嘘くさいよな。だって死ぬ間際の人間が冷静に真犯人の特徴なんて書けるかっての。少なくとも俺は絶対無理だね。俺の代わりにあいつが死ねばいいのにかと思うね。

さっさと拭き取ろうと思って特殊な洗剤を使ってみただけどさ。これがぜんぜん消えないんだよ。こうなると妙に焦ってくるじゃん？ もう夢中でゴシゴシやってたよ。

「くそっ…なんで消えないんだよ」

声が外に漏れちまったよ。

その血文字が拭いても拭いてもとれないんだよ。なんか呪われてるっていうの？　じゅ…なんたらっていう映画も見た事あるけどあの主人公になった気分だったよ。これはリアルな話焦るぜ。

それで疲れて一息入れようと思ってチラリと文字から目を離れたんだ。

『「こころがかたまっていくー」』

「…マジか？」

まだあったよ。ダイイング・メッセージ。チラリと横を見えるのと「なんで」の続きが。

もうこうなると『死者のメッセージ』というよりかただの落書きだよ。愚痴だよ。死ぬからって人に迷惑かけるなよ。なんだよ。映画じゃあんな立派なこと言っというて現実じゃ人間なんていい加減そのものじゃないか。死ぬまで人間なんて愚かそのものじゃないか。単なる馬鹿じゃないか。

「くそっ！　ただでさえ拭きとれないのに…」

大量に洗剤をぶちまけて床が剥げるくらいの力でゴシゴシやったよ。でもとれない。拭きとれない。汗がどんどん流れ出て行く。それでも俺はがんばった。

ゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシゴシ…

「…おい」

ポンツと肩を置かれた。ビクツとして肩を震わせた。その手は死者の手のように冷たかった。

「もういいよ。そんなに拭かなくても」

見上げると先輩だった。心配そうに俺を見てたよ。俺は呼吸を乱しながら言い訳を言った。

「すっ、すみません…なかなかこの文字が…」

「文字？　どこに？」

「えっ？　ここに書いてある…」

床を見てギョツとした。

文字がないんだ。

「なんで」も「こころがかたまっていく」も。

1文字も床に書かれていない。

―なら…俺は何を拭いてたんだ？

ポカンと床を見てると先輩が笑った。

「わかるよその気持ち。俺も死体になんて触ったら何度も手を洗いたくなるもんな。でもここはお前の家でもないんだからそんなに一生懸命やらなくていい」

違う。

そんなんじゃない。

ここに文字があったんだ。

ここに死者の文字があったから俺は拭きとうろうとして…。

(…あつ)

「…さて、次にどれを運ぶかな」

先輩はクルリと後ろを向くと次の段取りを考え始めた。

俺はあることに気づいて呆然と先輩の後ろ姿を見つめていた。

―なんでカーペットの下に血文字があったんだ？

おかしいぞ？

だって、死体はカーペットの上にあったんだ。

それならカーペットに血文字が書かれてあるのが普通じゃないのか？

死ぬ間際の人間が…苦痛の最中に冷静にカーペットをめくってあんな血文字なんて書けるのか？

―ブーン…

『死臭用の消臭剤』の機械は正常に動いている。なのにどこからか死臭がしてきた。もう一度床を見てみてもあの血文字は見当たらない。

―俺は…狂ったのか？

自分自身にショックを受けていると、また先輩が口を開いた。

「しかもつたいない部屋だな。女1人暮らし、オートロック、ペット持込OK。家賃は都内にしては安いし、部屋は広いし、クロゼットだって置ける。それに見た所お金には困ってなさそうだしな。羨ましい生活だよ独身者ってのは」

先輩の薬指を見た。指輪をしてる。初めて既婚者だと知った。

「でもリスクは高いよな。病気になってもペットは救急車を呼んでくれないし、高級バッグはすぐに現金化できないし、介護してくれる人もいないし…」

ゴソゴソとクロゼットの中を先輩は探っている。

「でもまあ。”独身貴族”って言葉もあるぐらいだし…気楽で自由でなんでもできるわな。あつ！　そういえば君も独身だっけ？」

先輩がこちらを振り向いた。いつも無表情なくせに顔が笑っている。

「―ほんと。君が羨ましいよ―」

先輩の目は―明らかに笑っていなかった…。

「…ということだ。いいか。なんで俺があんた等にこんな話をした

かわかるか？」

男の顔が帽子の影からチラリと見えた。

その顔は深いシワが入り、もういい年を感じさせた。

「人は1人じゃ生きていけないってことだよ。あんた等はいかにも人生を謳歌しているように思っているだろうけど、それはまやかしかだってことを俺は言いたかったんだ。いいか？　これは忠告だ。俺はあそこで学んだんだ」

「…忠告はありがたいが1つ質問させてくれ」

白髪の若い男が手を上げた。

「今もその仕事を続けているのか？」

「…やめたよ。俺には合わなかった。これから職探しさ。あんた等もここですっと1人でいると気が変になるぜ。せめて仕事でもしな！」

若者のファッションを着こなした中年男は白髪の若い男にさんざん説教をすると、気が晴れたのかその場から立ち去って行った。白髪の男はまたゴロリと横になると大きく欠伸した。とりあえずさっきの話をノートに書いてこうと薄汚れたバックからノートとシャーペンシルを取り出した。男は物書きだった。

男はサラサラとノートに次の1文を書いた。

『ある研究者が言うには、独身者と既婚者の死亡率は独身者の方が高いという。その原因の大半は健康状態が悪いとされている。いわゆる”精神がおかしくなる”ということだろうか』

「…ふむ」

寝転がりながらノートを眺める。ノートの奥から晴れた青い空が見える。白髪の男はシャーペンをクルクル回すとまたノートに文書を書いた。

『男の話は少し嘘くさいが、現実には違和感を感じた点が1つある』
白髪の男がチラリと横見た。

『男は”あんた等”という単語を何度も使った。それが自分とホームレスに向けた言葉だとしたら、それはかなり”おかしい事”だ。なぜならホームレスは男が話を始める前に”すでにこの場から去っていた”からだ。たぶん餌場へと行ったんだろう』

―視線の先には緑の芝生が広がっているだけだった。白髪の男以外誰もいない。

暖かな風とともにどこからか―死臭が漂ってきた。

『―男は俺ともう1人”誰”に話しかけていたのだろうか？』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663h/>

空白の話 ～イブツ運び～

2010年10月8日15時49分発行